

市内の祭り

市内には多くのお祭りがあります。市を挙げて行われる大きなものから、地域ごとに行われるものまで様々ですが、それぞれ大切にされてきたものです。ここでは、風流など一部を紹介しているに過ぎませんが、このほかにもそれぞれの地域ごとに、独自のお祭りや風習が大切に受け継がれています。



ひな祭り(さげもんめぐり)

柳川地方のひな祭りは、ひな壇といっしょに「さげもん」と呼ばれる吊りひなを飾るのが特徴です。毎年ひな祭りの時期は「さげもんめぐり」が開催され、市内の随所で華やかなひな飾りを見ることができます。また、期間中は「お雛様始祭」「お雛様水上パレード」「お雛様供養祭」「流し雛祭り」などの行事が連日催されます。



鷹尾神社の沖祭り

有明海の沖州に竹やヨシで祭壇をつくり、海上の安全と豊漁を祈願する鷹尾神社のお祭りです。この地域の漁師たちは、有明海を鷹尾の海と呼び、大事にしていますが、その歴史を今に伝えるお祭りといえます。



いちまんど 吉萬度

江戸時代から続いているといわれている無病息災を祈願する行事です。玉垂宮神主を先頭に江戸時代から受け継がれているお面を持った伴の者2人が各家庭を回り、お札を授けます。以前は他地区でも行われていたそうですが、現在は北矢加部、町矢加部を残すのみとなりました。



風流

風流は、鉦や太鼓を鳴らしながら舞や踊りを神に捧げるお祭りで、市内各地で行なわれています。地域によってそれぞれの特徴があり、地元の人たちにとっては最も親しみのあるお祭りです。異様な風体の赤鬼、青鬼らが地区内を練り歩く今賀の風流や舞い手が扇と色鮮やかな切紙で作った獅子頭を被る古賀日子山神社の風流は、県の無形民俗文化財にも指定されています。家族形態の変化など社会が大きく変わっている中、地道に守り続けられています。地域によっては担い手不足から休止に追い込まれているところもあるのが残念です。



沖端水天宮祭(舟舞台囃子)

沖端水天宮の大祭は毎年5月3,4,5日に行われますが、その最大の見ものは、水天宮横の掘割に浮かべた舟舞台上でお囃子が奉納演奏される舟舞台囃子です。はじめは文化・文政時代といわれており、楽器は三味線、笛、締太鼓、つり太鼓を使い、古典的な囃子に異国情緒豊かなオランダ風の調子が交じるため、別名「オランダ囃子」ともいわれています。現在は、舟舞台囃子保存会で継承されています。祭りのときには掘割の両側には露店が並び、子ども連れなど大勢の客で賑わいます。



中島祇園

毎年7月の第4土曜日に行われる中島八剣神社の祇園祭は、市内を代表する夏祭りです。東上町の「大蛇山」はスサノウミコトがヤマタノオロチを征伐した伝説にちなんで始められたといわれ、鉦や太鼓をならし、大蛇の吐く火で夜空を焦がしながら、中島の町を夜遅くまで練り歩きます。また、三味線の音色と華やかな着物姿で舞う踊り子を乗せた西上町の「踊り山」、武衣装束の一隊をしたがえた中町の「殿様行列」、軽快なリズムにあわせて愛嬌をふりまく、からくり仕掛けの子獅子がかわいいう下町の「獅子山」などの山も神社前に次々と姿をあらわし、祭りを盛り上げます。



ほんげんぎょう

一年の無病息災を願い、その年の吉凶を占う正月行事で、わらや竹、正月の飾りなど組んだ櫓に火を付け、みんなで見守ります。サギチョウ、ドンド焼きなど様々な名前前で全国で行なわれていますが、柳川ではほんげんぎょうと呼ばれます。一時廃れていましたが、最近では地区ごとに盛んに行われるようになっており、特に両開地区では「ほんげんぎょう祭り」として盛大に行なわれています。



堀干しと水落ち

掘割の環境整備のため、年に一度掘割の水を空にして、川底の清掃を行なうことを一般に「堀干し」と呼びますが、農村部では、その際上げられた泥を乾燥させて肥料としても利用していました。また、干上がった川から魚を取ったり、酒宴を開いたりする風習もあり、一種のイベントとして親しまれていたようです。現在では、毎年2月中旬ごろに城堀水門を締切り、城堀を空にする「水落ち」が行われており、2月下旬のお堀開き前の冬の風物詩となっています。



有明海花火フェスタ

両開のむつごろうランド周辺で行なわれる花火大会で、有明海を彩る数千発の打ち上げ花火をはじめ、ギネスブックにも認定された名物ナイアガラの迫力は圧巻です。その他にもいろいろなイベントも行われ、新しい柳川の夏の風物詩となっています。



崩道祇園祭の大蛇

崩道の観音堂で行われる祇園祭では、地元の子どもの手で雌雄一対の大蛇が作られます。この大蛇は麦ワラの骨組みに湯の泥を塗って作られるもので、干拓地昭代ならではの祭りです。

おにぎえとどろつくどん

三柱神社秋の大祭はこの地方最大の秋祭りです。山車(おどり山、どろつくどん)が町中に繰り出し、夜遅くまで賑わいます。「おにぎえ」の名称は、大賑わいの発音がつまってしまうので「おにぎえ」と呼ばれるようになりました。また、お囃子の音からその名が付いたという「どろつくどん」は、文政9(1826)年、祭りを祝うため、町の間屋街の人たちが江戸の神田囃子や京都祇園の山鉦を参考にして、「山車」を奉納したのが始まりといわれています。県の無形民俗文化財にも指定されている、おにぎえにはなくてはならないおどり山車です。

